

## 目次

『日中社会学研究』第16号		宮城宏先生と日中社会学会	P17
原稿募集のお知らせ	P1	宮城宏元会長の退会に寄せて	P17
第19回大会関連	P1	中日社会学会との協議	P18
第28回総会報告	P10	留学雑感	P18
理事会報告	P13	事務局からのお知らせ	P20
冬季・研究集会のお知らせ	P15		

## ■『日中社会学研究』第16号

### 原稿募集のお知らせ

(編集委員会)

当学会の機関誌『日中社会学研究』第16号の原稿を下記の通り募集いたします。

投稿を希望される方は、2007年12月8日(金)までに電子メールにてお申し込み下さい。登録受付の旨を返信メールにてご連絡いたします。会員の皆様の投稿をお待ちいたしております。

記

投稿登録締め切り：2007年12月8日  
(原稿提出締め切り：2008年2月2日)

原稿登録の際の必要記入事項：

- ①氏名
- ②連絡先住所、TEL、FAX、メールアドレス
- ③所属、身分
- ④投稿予定原稿のタイトル

投稿登録先：

陳 立行 (日本福祉大学情報社会科学部)

E-mail : chen@n-fukushi.ac.jp

c\_lixing@hotmail.com

\*電子メールで投稿申し込みができない方は、  
FAX (0569-20-0127) をご利用ください。

## ■第19回大会関連

### 日中社会学会第19回大会を終えて

陳 立行

(第19回大会実行委員長・日本福祉大学)

会員の皆様のご協力により、日中社会学会第19回大会を無事に終えました。大会の後、何人かの会員の方から「充実した内容の大会だった」などのメールをいただきまして、ほっとしている次第です。

21世紀中国は大きな新興国として、これまでの世界の構図に変容を迫っております。すでに経済の分野を大きく超え、政治支配のあり方、社会統合のメカニズム、環境との共生の可能性などといった分野まで、大きく注目されるようになりました。特に高度経済成長が10年以上続いている中、格差問題、民族問題、地域社会の崩壊などの諸問題が噴出し、今後の中国社会の安定と持続的な発展が達成されるかどうかは、全世界にとって不確定な変数となり、各国の社会学者の知恵が問われる時代になっています。

このような時代の要請に応えることは日中社会学会の会員皆様の共通かつ強い願望と思い、本大会は、学問の刺激と研究交流の場としてより効果的に機能するように努めました。中国の現状と喫緊の課題を的確に把握するため、「中国の社会の行方—調和と共生」というシンポジウムを日本福祉大学 COE と共同で開催し、中国社会科学院社会研究所前所長景天魁先生

を招いて基調講演を行いました。景先生による、中国の調和社会構築のための最新の政策や試みに関する講演の後、調和社会の構築に関わる中国の現状と課題についてパネラー討論を行いました。パネリスト達の鋭い対論は参加者に大きな刺激を与えたことと思います。

そして、本大会では、科研セッションの発表を設けました。このセッションの狙いは、会員により担われている科研費研究の質を国際的に認められる高いレベルに引き上げることにあります。本セッションでは、中国の大学や研究機関からの学者も参加し、二つの科研プロジェクトの中間発表に対して、多角的な議論を深めました。これを通じて、日本と中国の社会学者の真剣で、活発な議論が繰り広げられ、会員の科研費研究がより高い水準へ到達するために、意義ある貢献をしたと思います。

さらに、学会大会慣例の自由報告では、今年は若手研究者の高いレベルの研究発表が見られました。また女性研究者の活躍が印象的だったように思います。

最後になりましたが、本大会では多くの会員皆様のご協力を賜り、無事大盛況のうちに幕を下ろすことが出来ました。心より御礼申し上げます。一方、参加人数が多いことから懇親会の会場がかなりの混雑となったこと、大会実行委員会として、皆様にお詫び申し上げます。

## ■大会参加記

### 第1日：6月2日（土）

#### 基調講演「構築和諧社会的機制」

景 天魁

（中国社会科学院社会学研究所前所長・院士）

司会：陳 立行（日本福祉大学）

通訳：鍾 家新（明治大学）

## 松木孝文（名古屋大学）

基調講演の表題にある「和谐社会」は「調和社会」と訳されるが、この「調和」が何故重要となるのか。講演では各集団、利益集団において共通の利益を見つけるのが最良であるが、共通点がないときには均衡点を見つけ、その両方が不可能である場合は調和システムを作ることが重要であると述べられた。これを中国の現状に照らした場合、農村都市間などで格差は大きく、また共通点や均衡点も見出し難く、福祉政策を行ううえでとりわけ調和が念頭に置かれる必要がある。20年前の鄧小平による市場経済導入の決定に続き、20年後の今また新しい社会モデルの構築を迫られていると言えよう。



景天魁先生(左)、鍾家新会員(右)

## 国際シンポジウム

「中国社会のゆくえ——共生と調和」

司会：陳 立行（日本福祉大学）

討論者（五十音順）

黒田由彦（名古屋大学）・小林一穂（東北大学）

駒井 洋（中京女子大学）・首藤明和（兵庫教育大学）

・袖井孝子（お茶の水女子大学）

・中村則弘（愛媛大学）

・羅 紅光（中国社会科学院・社会学研究所）

## 長田洋司（早稲田大学）

### 1. 解題

パネラー討論では先ず、司会の陳先生から問題提起がなされた。それは、2004年に中国政府により出された「調和社会の構築(構築和諧社会)」という発展目標の実現のためには、先ず、「共生」の理念の浸透が必要ではないか、そして、共生的に調和した中国社会の構築に対して、その問題の所在と解決策の模索が求められるというものである。

### 2. 中国社会の実態報告

陳先生の問題提起に続き、首藤先生、小林先生、袖井先生、黒田先生により、中国社会の実態報告がなされた。首藤先生は、中国の低層階級に着目して報告された。都市部においては、これまで単位が担っていた外部機能が外部化したことにより現れた社区建設と小政府化という流れの中で、底辺層や貧困層が形成された。一方、農村部では、流動人口が1億3千万とも言われ、その内、3～4千万人が大都市へと出稼ぎに出ている。こうした状況下において、家族の離散、独居老人の増加などが現れ、家族機能が成り立たなくなっているのである。そして、日中共に、アジアでの外発的生産性システムを構築する中での内発的発展が叫ばれる中、家族の機能は改革開放以降、人間関係が崩壊してしまっている。今後、福祉だけでなく、人と人との連帯や参加、相互承認を生産性システムから解放させることが必要となるのではないかと提言した。

次に、小林先生は、山東省で自身が行われた農村調査による結果から報告された。現在、農業と工業が共に発展するように促されている中で、農村生活の都市化の様子が調査された。調査によると、義務教育は進んでいるもののまだ高学歴化には至っていない、農業との兼業が進んでいる、都市に対しては大都市よりも周辺

都市に対する意識のほうが身近に感じられるといった点が明らかになったということである。そして、現在はまだ都市化の過渡期であり、農村の人々は都市への漠然とした憧れはあるものの、どうしても都市へ向かいたいという渴望はなく、理想は兼業農家であるという。おそらく、大都市で起こっている問題を彼らも把握しており、そのため、都市への吸引力が弱いのではないかと分析した。

また、袖井先生は、「転換期中国の社会保障」と題して、中国の社会保障制度の現状を日本との比較の視点で説明した。報告の最後では、社会主義的福祉国家の可能性として、社会保障制度が必要であることを踏まえた上で、中国型福祉国家モデルが可能であるかという疑問を呈した。

そして、黒田先生は、都市における市民社会の発展の現状について、改革開放以降、歴史的にどのように成熟したのかについて語った。都市の社会構造の変化としては、改革開放政策以降、都市社会構造が大きく変化しており、それは「単位」から「社区」へといった部分でも現れている。そして、その新しい社会構造としての「社区」は、現在、最低生活保障や医療サービスなどの役割を担っているという。だが、「社区」というのは近隣政府であり、その補完性の原則には地域差があるかもしれないと指摘した。また、「社区」以外の中間集団の状況としては、党の指導をどのように捉えるかという問題はあるが、一種のボランティア組織と考えれば育ってきていると分析した。

### 3. 課題の提起

続いて、駒井先生、羅先生、中村先生により、それぞれ課題が提起された。

駒井先生は、共生は“差異”を前提としており、日本では“多文化共生社会”と言える。こうした言葉は、中国社会に当てはまるのだろう

かと疑問を呈した。そして、その実現のためには、①(構造的な)平等性の確保、②文化の差異性の確保が必要である。しかし、中国では、① 党员や資本家、都市住民、農民という3つの主要階級の平等をどこまで確保するか、②地域的な文化の素材もあるが、社会主義革命や市場経済化など文化の差異を破壊してきた、といった問題がある。これからは、同一化に対抗する地域的差異性を構築することが理想であり、新しい中国文化の構築が課題である、とまとめた。

次に、羅紅光先生は、人と自然をキーワードに挙げ、同時進行している文化的差異と生物的差異に対して、どうやってその差異にアプローチしていくかが課題とした。そこで、2003年に行われたメコンリバーセミナーを例に挙げ、交流により共有することでひとつの智慧を出し、他者理解のメカニズムを構築することの重要性を語った。

中村先生は、先ず、困難なテーマであるという現実、矛盾の中で考えること、和諧社会とはオルタナティブなテーマであることを指摘した。調和の取れた社会とは、競争的経済体制の中に埋め込まれており、共生とはきれいな社会が想定されているが、社会のあり方で大事なものは、各々の在り方を知ること、混沌とした世界であるということであるという。つまり、調和の取れた社会について折り合いをつけるためには、多様な世界が共存する社会の中で、その境界や裏表にある混沌とした第三の世界を見出すことであり、そうすれば、実践的な対応ができるのではないかと提起した。

#### 質疑応答・討論(フロア・パネリスト間の議論)

質疑応答の時間では、パネリスト、フロアから活発な意見が交わされた。以下、質問及びその回答の一部である。

Q. 文明にも地域性があると感じ、調和社会

にも多様性があるのだが、文化と文明に触れて本当に地域性があるのか？

A. 地域と文化の観点は中国の多文化主義を構築していない。文化のクレオール主義が大事である。

Q. 共生と調和を取り上げることの危うさがあるのではないか？共生と調和は、支配階級が提唱するものではないのか？低層階級は本当に実現可能と考えているのか？そしてもし不可能なら、それを乗り越えるものはあるのか？共生と調和はあいまいな概念ではないか？これからの将来を考えるとキーワードは公共ではないのか？

A. 格差がひどい状況での裏返的に“調和社会”といわざるをえないのではないのか？社会保障、社会福祉だけでは解決できないであろう。これだけ格差が進行する中で共生と調和を取り上げるのはおかしい。中国都市社会の脈絡で考えれば、全く無駄な行動ではない。全く生活できない人を阻止するラインで進むのでは？その意味で社区建設は評価できるのでは？

・ 共生というのはちょっと欲張りな議論ではないか？中国人は日本人と逆で他人との差で自分を認識する。社会学者として中国の社会の安定、最低レベルの平等のためにどうするか？

・ 日本のコミュニティケアには意味があった。人の尊厳を認めることが大事であるが、差異を唱導することの危うさもある。生活のシステムから抜け出した文化を認め、ハイブリティズムを認めるべきである。

・ 中国農村は二極分化しており、中間層が分厚くならなければならないのだが、新農村

建設によるインフラ整備と底上げがそれになるのではないか。

- ・現状の改善は難しいが、農村は情報が少ないのではないか。しかし、情報化が進むと不満は募る。そこで、最低生活保障が必要であり、それを危機感を持って急ぐべきである。
- ・開発という目標をどう相対化するかが理念的課題である。社区には両面があり、市民社会への方向と開発主義に加担する方向である。
- ・資本主義プロセスには本源的蓄積が課題となる。文化的共生の前には平等が重要となる。乱れは農村から来ている。政治改革から金儲けへ転身して現在の問題を生み出したのである。
- ・文化抜きでは生きられないという前提がある。文化は表層の部分で違いがあるが、基本の部分は同じである。文化を真正面から向き合い批判することである。
- ・最低レベルの保障をどうするか？保障する文化を創らないといけない。日本人に危機感がない。中印が経済発展の中で環境問題などはどうなるのか？日本も含めて中国と共に生き方、生活のあり方を考え直すべきである。
- ・もう中国だけの問題ではなく、日中の共生を考えるべきである。

以上、パネルディスカッションの様子を再現してみたが、全体的な印象としては、日中双方の研究者の方々が、非常に活発な意見交換をし

ながら、将来の中国の進むべき方向性について真剣に模索している姿を見ることができた。そして、こうした対話を通して、将来の中国、さらに日中関係にとっても何らかのプラスの効果をもたらすのではないかという確信めいたものが感じられた。



## 第2日：6月3日（日）

### 一般自由報告A

司会：東 美晴（流通経済大学）

- ・アラタンバートル（神戸大学）「中国のモンゴル族にみる言語継承と教育実践——内モンゴル農村地域における学校選択を中心に」
- ・植村広美（呉工業高等専門学校）「農民工子女の教育機会の保障に関する地方政府の役割」
- ・リブネ宮崎紀子（香港中文大学日本研究学科）「香港社会における中等教育機関での日本語教育の現状——需要と問題点を中心に」
- ・合田美穂（香港中文大学歴史学科）「中国と東南アジアにおける関係の中での香港の役割」

松木孝文（名古屋大学）

アラタンバートル会員による報告『中国のモ

『モンゴル族に見る言語継承と教育実践』は学校におけるモンゴル語教育と両親の職業階層との関連を指摘しつつ展開された。言語の継承は中国社会における少数民族を論ずる上で見逃せない論点であろう。本報告においては職業、とりわけ経済状況に余裕のある家族が言語教育に高額の投資を行っていることが提示された。データは現地での聞き取り調査に拠っており、内容も多岐に渡っている。そのため、今回はあえて職業階層と学校教育に焦点を当てているものの、分析の角度を変えた報告を聞くことができれば一層モンゴル族社会を知ることができるのでは、という印象を受けた。次の報告も心待ちである。

植村広美会員による『中国における「農民工子女」の教育機会の保障に関する研究』もまた現地調査におけるデータを軸とした報告である。現行の戸籍制度のもとでは都市における出稼ぎ労働者子弟の教育はカバーされておらず、義務教育を受けられない子供の数は多数に上る。本報告において取り上げられた事象は制度がフォローできない問題を非制度的な領域で解決しようというものであり、民衆の中から立ち上がる新しい動きとして位置づけられる。とはいうものの、この活動は現場での実践において多くの問題を抱えており、また、こうした活動を手放しに評価することは本来制度で担うべき事柄をも一方的に民衆へと押し付ける論理になりかねない。あらゆる場面で論じられる種のジレンマではあるが、これが現場のシビアな状況の紹介を通して改めて突きつけられた、というのが本報告から受けた印象である。

リブネ宮崎紀子会員の『香港社会における中等教育機関での日本語教育の現状』は現在の香港の中等教育課程在籍者における日本語教育を取り上げたものである。本報告においては主

に「何故中学生が日本語学習を希望するのか」「日本語教育における現時点での問題は何か」等の問題意識を軸に日本語教育の現状を紹介している。中等教育課程においては日本のサブカルチャーに親しんでいる者が多く、それが日本語学習者増加の要因となっているという。海外のサブカルチャーが海を越えて多数の若者の進路に影響を与えるという構図は国際化や情報化など単純な括りをすることも可能ではあるが、まさにその現場における具体的なジレンマを示唆している点で本報告は非常に興味深い。

合田美穂会員の『中国と東南アジアにおける関係の中での香港の役割』は先の三報告とは違って変わって香港の位置づけというマクロ視点からの議論となる。本報告では政治・経済的な環境の変化を時期区分しつつ香港の「優勢」が論じられた。今回明らかにされたのはとりわけ中国および東南アジアにおける華人のアクティブさであり、また香港が華人社会の存在する場として「優勢」を保っていることである。本報告は報告者自身の参与観察や新聞報道など、日々蓄積されたいわばミクロな情報をマクロな事象の分析に生かした好例ではないだろうか。

## 一般自由報告 B

司会：根橋正一（流通経済大学）

- ・宮内紀靖（中国瀋陽師範学院）「中国の現今の社会変化は社会構造変動なのか」
- ・賽漢卓娜（サイハンジュナ）（名古屋大学大学院）「日本の都市近郊農村に嫁ぐ中国人妻にとつての『農村』と『農家の嫁』」
- ・晨 光（神田外語大学）「ソーシャル・キャピタル投資と社会発展」

## 長田洋司（早稲田大学）

第二日目は、午前9時半より二つの部屋に分かれて一般自由報告が行われた。一般自由報告Bのブースでは、流通経済大学の根橋正一先生が司会をなさり、3名の方から報告がなされた。

先ず、賽漢卓娜(サイハンジュナ)先生は、「日本の都市近郊農村に嫁ぐ中国人妻にとっての『農村』と『農家の嫁』というテーマで、東海地域の都市近郊農村部 T 市の農家に嫁いだ中国人妻の方々への実際のインタビューや参与観察調査を通して、日本人農家に嫁ぐ中国人女性の認識と現状について報告した。そして特に、2つの具体的なインタビュー事例を紹介しており、その語られた体験や認識は全く正反対のものであった。これらの事例から、中国人妻が「準抛卒」を規定する一つの重要な要因として、所属集団、つまり嫁ぎ先である農家の受け入れ体制が挙げられると指摘した。また最後に、所属集団との親密さにより、「準抛集団」がかつての所属集団から現在の所属集団へと変動しうる、あるいは変動し得ないことが分かる、とまとめた。フロアのほうからは、受け入れ体制が行政的な体制なのかどうか、地域的或いは特性の影響があるのではないかと、また、紹介された二つの事例の受け入れ先、環境をチェンジしても同じ結果が得られるか等、多くの質問や意見が出された。

次に、宮内紀晴先生より、「中国の現在の社会変化は社会構造変動なのか」という報告がなされた。報告では先ず、社会変化・変容の種類と態様について説明がなされ、前社会全体構造を崩壊させ、新たな社会全体構造を打建てるような劇的な“変質”である『変動』と従前の社会構造に戻る“変容”である『変化』とを区別することを説明している。そして、社会構造変動を、その社会を構成する人間全てによって、社会の意識・価値・行動・役割・制度・規範・その他の、全ての社会構成要素が、ほぼ同

時に『カタストロフィ』的に、大転換することであり、またその主要な過程にあることであると、位置づけた。これを踏まえて中国を見てみる時、中国社会の現在の社会激動と言われるものは、社会全体構造のカタストロフィー変容、即ち『社会全体構造変動』とは位置づけることはできないし、全体構造の部分成す、部分構図の変動(体制変動)でもないのではないかと分析した。フロアからは、カタストロフィー変容を1980年代の超安定社会構造と理解しているのか、社会構造の変動は文化の変動か、また、文明と文化はどちらが先に誕生したのか等の質問が出された。

最後に、晨光先生より、「ソーシャル・キャピタル投資と社会発展」というテーマで報告がなされた。この研究では、ソーシャル・キャピタルアプローチを用いて中国の市場化を分析し、市場化における地方政府と外資企業の間社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)が形成され、地域社会の発展が実現されるという構造が実証的に考察されている。報告では先ず、市場化により拝金主義や人間関係の悪化といった状況が現れており、その解決策としてソーシャル・キャピタルがあることを述べた。そして、ソーシャル・キャピタルについて、西洋社会と非西洋社会との差異、その問題点を挙げ、地方政府や企業との間のソーシャル・キャピタルの形成内容等について説明がなされた。さらに報告の後半では、ある地域社会におけるソーシャル・キャピタルの現状について具体例も挙げて紹介がなされた。フロアからは、市場社会と市場化している社会の違いとは何か、外から進出する企業と地元政府とのソーシャル・キャピタル形成よりも、その地域の元々の産業を発展させることがもっと重要なのではないかといった質問、意見が出された。

以上、このブースでは、全体的に理論面、実証面でのそれぞれの報告があり、バランスが取

れていたという印象を受けた。

### 科研費セッションA「中国都市社区研究」

司会：鍾 家新（明治大学）

コメンテーター：南 裕子（一橋大学）

通訳：李 研焱（駒沢大学）

劉 曉梅（滋賀大学）

- ・楊 剛（東北財経大学）「社区合作社」
- ・胡 加榮（首都経貿大学）  
「農民上楼」（都市社区に移住した農民）
- ・常 向群（英国・ロンドン経済大学）  
「社区礼尚往来」（近隣ネットワーク）
- ・劉 曉梅（滋賀大学）「農村の年金制度」

長田洋司（早稲田大学）

午後からは、科研費セッションとして、二つのブースに分かれての報告がなされ、このブースでは、「中国都市社区研究」というタイトルで五人の方から報告をいただいた。

先ず、楊剛先生から「社区合作社」というテーマで、大連市の社区公共サービス社を事例として、最低生活保障制度を再就職と結びつける過程の中で、如何にして貧困対象者の社会福利権利の確保が実現できるかという報告がなされた。報告では先ず、大連市における社区公共サービス社(民間組織或いは自治団体で、最低生活保障を受けている対象者の中で労働能力のある者達を組織して、生活保障や労働就業を促進させることを目指す)の現状や問題点について、事例を紹介しながら説明がなされた。そして次に、こうした問題を考える際に問題となる資産の構築(誰が保障し、どのように集めるか)について提起された。そして、中国においては、社区公共サービス社が、労働能力のある最低生活保障者やその他の社会メンバーを組織することで、資産を累積するための模索をしているとし、資産の蓄積を通して公民の福利権

利を増進させることが中国社会の福利発展における必然の路となるだろうと分析している。更にはまた、社区公共サービス社の発展のためには、政府のサポートと自己努力の両方が必要であるとした。フロアからは、事例で紹介されている公共サービス社の資金源の援助は一時的なものであるかという質問に対し、最初は援助が必要で、政府からの交付金の形で毎年一時的な寄付を受けていると回答した。

次に、常向群先生が、「社区礼尚往来」というテーマで、個人、社会(社区、社团)と国家との関係について、“礼尚往来モデル”(「礼をもって礼を返す」というモデルで、費孝通先生の研究に基づく)を提起している。報告は①国家/社会の関係および“国家/社会二分法モデル”(the state/society dichotomous model)について、②個人、社会と国家との関係の研究について(先行研究など)、③個人、社会(社区、社团)と国家との関係における“礼尚往来”モデル(lishang-wanglai model)という三つの部分に分けて行われた。そして特に、実際の調査地となった江蘇省の江村の状況が写真を交えて紹介され、その“礼尚往来”によって成り立っている状況が説明された。

次に、胡加榮先生により、「農民上楼」というテーマで、都市化過程の中で北京における土地を失って都市社区へと移住した農民達について、彼らの就業問題について、その現状と問題点、対策について報告がなされた。現在中国には、失地農民が4000万人以上いると見積もられており、彼らの就業問題を解決することが重要となっている。そうした中、報告者自身が二年間に渡って調査している地域が紹介された。この地域では、住民達(都市社区へと移住した農民達)の生活は表面的には良さそうだが、彼らが就業するためには学歴など条件が整っておらず、困難があるという。報告の最後に問題への対策として、失地農民達への経済的補償

や社会保障のシステムの完備、就職のための訓練メカニズムの構築、彼らへの就職ルートを開いてあげることなどが挙げられた。

また、劉曉梅先生は、「農村の年金制度」と題して、その現状と課題についての報告を行った。報告ではまず、中国農村年金保険制度の沿革として、その変遷を1986年から現在までを四つの段階に分類した。次に、中国農村年金保険制度の現状として、制度的な内容について紹介がなされ、基本法案は1992年に民政部による通知に沿ったもので、2006年に「新型農村社会養老保険試行を推進するための意見について」というものが提示され、各方面から意見が求められているという。またさらに、中国農村年金保険制度の動向として五つの点を挙げている。第一に、事業展開の地区と保険加入の人数が、下落傾向から回復に向かっている。第二に、土地収用農民の社会保障活動の進展。第三に、出稼ぎ労働者の特徴に合わせた年金保険方法の模索活動。第四に、各地区において様々な形で新型農保試行活動を推し進める。そして第五に、新型農村社会養老保険に関する管理情報システムを開発。報告の最後では、中国農村年金保険制度の課題として、制度や管理体制の問題点、安定した政策と資金の欠如等が挙げられた。

セッションの最後では、コメンテーターの南先生が、全体的な総評と報告者への質問が出された。全体的な感想としては、政策を受ける側が如何に参加し、構築していくかが重要であること、また、コミュニティ内の自助、互助の力が必要であるといった印象が述べられた。

## 科研費セッション B

### ①北東アジア地域研究財団助成金セッション

#### 「中国の地方自治研究」

司会：黒田由彦（名古屋大学）

コメンテーター：江口伸吾（島根県立大学）

・李 曉東（島根県立大学）

「中国都市における住民自治に関する一考察——北京石景山区魯谷社区を例として」

・唐 燕霞（島根県立大学）

「中国の村民自治についての試論——村民自治第一村からの考察」

事務局

中国の都市及び農村の自治について、解放前、解放後の単位社会（都市）と人民公社（農村）、改革開放後の居民委員会（都市）と村民委員会（農村）などについて、国家と社会、政治構造、権力構造、自治の原則や実際（財政、決議の手続き、公開と監督の制度、委員の選出方法）など、多角的な視点から分析が試みられ、現代中国の自治の現状と課題が明らかにされた。

### ②「中国の底辺階層研究」

司会：晨 光（神田外語大学）

・中村則弘（愛媛大学）

「和諧社会と中国の底辺階級」

・首藤明和（兵庫教育大学）

「青海と西藏における底辺階級」

事務局

中村則弘会員より、研究の全体構想が紹介された。すなわち、西欧近代、近代世界システムを問い直し、東アジア諸社会の歴史的特性、文化、エコロジーを生かす民衆の側に立った新たな発展構想を、その担い手となる人間に着目しつつ模索することだとされた。首藤からは、2006年夏に収集した現地調査資料と文献に基づき、特にチベット族の歴史や文化に着目することで、中国社会の貧困問題や環境・エネルギー問題について、いかなる知見が得られるのか説明がなされた。

### ミニシンポジウム「現代中国の生活変動」

司会：唐 燕霞（島根県立大学）

話題提起：飯田哲也、坪井健（駒澤大学）、

## 首藤明和（兵庫教育大学）

### 松木孝文（名古屋大学）

ミニシンポジウムでは2007年3月に発刊された『現代中国の生活変動』（飯田哲也編、時潮社）を題材に議論が交わされた。まず編者である飯田哲也会員から本編のコンセプトが再確認された。多様な事象を取り扱う社会学は拡散していると思われがちであるが、本来はそうではなく、実体として顕れるミクロ的な視点と理論として構築されるマクロ的な視点を繋ぐことが重要である。本編では現実面としては中国現地での経験、とりわけ「生活」を軸とし、理論面では「階層」に着目したという。

その後各話題提供者より本編各章に対するコメントがつけられた。その中でも本大会初日の国際シンポジウムの内容（「調和社会」）に関連して注目されるのが「階層ではなく階級のほうが分析枠組として適切だったのではないか」すなわち、中国社会における利害関係やそこから生じるコンフリクトに着目してはどうか、というコメントである。確かに中国社会においては複雑に利害関係が絡み合っており、そこに注意を払うことなしに現実を理解することは難しい。国際シンポジウムにおける「調和社会」の議論もまさにコンフリクトが存在することを前提として展開されているといえよう。また、話題は留学生をはじめとする「越境者」にも及び、フロアとのやり取りの中で「どの範囲で調和を考えるか」という課題も提出された。すなわち調和を考えるにしても現在は国境を越えて人やモノ、資本が行き来している時期である。当然社会も一国単位ではなく国際的に開かれた開放系として存在していることを念頭に置かなければならないだろう。以上、ミニシンポジウムにおいても忌憚ない議論が交わされたが、それも本編の提供する、現実に関する豊富な知見ゆえと言えるのではないだろうか。

## ■第28回総会報告

2007年6月2日（土）日本福祉大学

中村会長からの開会の挨拶に続き、晨光会員が議長に選出され、議事に入りました。

### 第1号議案 2006年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催 07.6.2～3
2. 機関誌『日中社会学研究』 第14号編集発行（300部）、第15号編集
3. 『ワーキングペーパー集』第2号の編集発行（300部）
4. 「ニューズレター」発行 3回 48号～50号 06.11 07.3 07.5
5. 理事会開催 3回 06.6.3 06.10.28 07.6.2
6. ホームページの運営
7. 会員概況 前大会以降 入会 13名 退会 5名  
現会員 183名（一般104, 学生79）  
（在外国外国人会員は含まず）
8. 編集委員会報告
9. 研究委員会報告 秋の研究集会 2日間3部構成 06.12.8～9
10. 中日社会学会との交流推進

### 第2号議案 2006年度決算報告

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、I. 一般会計報告、II. 第18回大会・第27回総会特別会計について、報告がなされました（備考については略してあります）。

#### I. 一般会計報告

収入総額	1,325,338
支出総額	773,768
差し引き残額（次年度繰越金）	551,570

※残額内訳	
郵便局定期預金	300,000
郵便振替口座	880
郵便局普通口座	221,709
現金	28,981

収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金	716,543	716,543	0
会費収入	650,000	606,000	▲44,000
機関誌販売	50,000	2,500	▲47,500
雑収入	1,000	295	▲705
合計	1,417,543	1,325,338	▲92,205

支出の部

費目	予算額	決算額	残額
機関誌制作費	600,000	434,700	165,330
ワーキングペーパー集制作費	80,000	121,000	▲41,800
学会ニュース経費	20,000	0	20,000
事業費	5,000	0	5,000
事務費	70,000	60,448	9,552
通信費	100,000	96,620	3,380
会議費	50,000	0	50,000
大会補助	100,000	60,200	39,800
予備費	392,543	0	392,543
合計	1,417,543	773,768	643,775

**Ⅱ. 第18回大会・第27回総会特別会計**

日時：2006年6月3日・4日

会場：島根県立大学

大会会計担当者：唐 燕霞

収入総額 335,000

支出総額 335,000

残額 0

収入の部

大会参加費	60,000
懇親会費	175,000
浜田市補助金	335,000
計	335,000

支出の部

石見神楽上演料	80,000
懇親会費	205,000
事務費	13,200
アルバイト料	30,600
飲食料費	6,200
合計	335,000

上記の通り報告申し上げます

2007年5月18日

日中社会学会事務局

会計担当理事 唐 燕霞 (唐)

**第3号議案 2006年度会計監査報告**

細萱監査より、以下の資料について監査結果について報告がなされました。

決算報告および会計監査報告を受け、2005年度決算が賛成多数で承認されました。

**2006年度監査報告**

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2007年5月30日

監査 細萱 伸子 (細)

富田 和広 (富)

#### 第4号議案 2007年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会の開催
2. 機関誌『日中社会学研究』編集発行 第15号, 第16号
3. 『日中社会学会ワーキングペーパー集』編集発行第3号
4. 「ニューズレター」発行 3回
5. 研究会開催 2～3回
6. 理事会開催 2～3回
7. ホームページの運営
8. 会員業績一覧の作成
9. 中日社会学会との交流
10. 中長期構想の策定
11. 第20回記念大会企画準備

#### 第5号議案 2007年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

##### 収入の部

	予算額
前年度繰越金	551,570
会員会費	650,000
機関誌販売	25,000
雑収入	1,000
合計	1,227,570

##### 支出の部

	予算額
機関誌制作費	500,000
ワーキングペーパー集制作費	80,000

学会ニュース経費	20,000
事業費	5,000
事務費	70,000
通信費	100,000
会議費	50,000
大会補助	50,000
予備費	352,570
合計	1,227,570

#### 第6号議案 日中社会学会会則改正について

以下の改正案について事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

日中社会学会会則（改正案）

第6条 役員の職務は次の通りとする。

2 理事は、会長を補佐し本会の運営に当たる。

理事の互選により、庶務担当理事・名簿担当理事・会計担当理事・發送担当理事・ホームページ担当理事・機関誌編集担当理事・ワーキングペーパー編集担当理事・研究プロジェクト担当理事・ニューズレター担当理事・大会担当理事を定める。

付則10 2007（平成19）年6月2日改正。  
理事の職務分担に庶務担当理事を追加。

#### 第7号議案 理事、監査、会長の承認

日中社会学会会則および日中社会学会役員選出規程にもとづいて、(1)理事、(2)監査、(3)会長の順に審議がなされました。

##### (1) 理事の承認について

原案として以下の15名が示され、賛成多数で承認されました。（敬称略）

東北	小林一穂
関東	東美晴, 石井健一, 坪井健, 根橋正一
中部	黒田由彦, 陳 立行, 西原和久
関西	浅野慎一, 首藤明和
中四国	江口伸吾, 陳捷, 唐燕霞, 中村則弘, 宮崎満

## (2) 監査の承認について

原案として以下の2名が示され、賛成多数で承認されました。(敬称略)

富田和広, 鍾 家新

## (3) 会長の承認について

総会を休会としている間に、(1)で承認を受けた新理事会が開催されました。その結果、中村則弘理事を会長に推挙する旨が、再開後の総会に報告され、賛成多数で承認されました。

## 第8号議案 次年度大会・総会の開催地・開催校について

理事会原案として流通経済大学(新松戸キャンパス)が示され、賛成多数で承認されました。

## ■理事会報告

### 2006年度第3回理事会報告

2007年6月2日(土) 日本福祉大学

#### 審議事項

#### 1. 第28回総会議案書について

事務局作成の総会議案書(案)をもとに審議し、同日開催の総会議案書とすることが合意されました。

### 2007年度第1回理事会報告

2007年6月2日(土) 日本福祉大学

#### 審議事項

#### 1. 新会長の推挙

中村則弘理事が満場一致で会長に推挙され、同理事より受託する旨の報告を受けた。

### 2007年度第2回理事会報告

2007年6月3日(日) 日本福祉大学

#### 審議事項

#### 1. 理事の職務について

理事の職務について、日中社会学会会則第6条2に則り、以下のように決定した。

会長：中村則弘

理事：

浅野慎一(大会・研究プロジェクト担当)

東美晴(発送担当)

石井健一(ホームページ担当)

江口伸吾(名簿・会計担当)

黒田由彦(機関誌編集担当)

小林一穂(機関誌編集担当)

首藤明和(庶務(事務局)・ニューズレター担当)

陳 捷(発送担当)

陳 立行(機関誌編集担当)

坪井健(ワーキングペーパー編集担当)

唐燕霞(名簿・会計担当)

西原和久(大会担当)

根橋正一(研究プロジェクト・発送担当)

宮崎満(ワーキングペーパー編集担当)

(五十音順)

#### 2. 会長によるマニフェスト(案)について

中村則弘会長より、2007年度から2009年度のマニフェスト(案)が提議され、審議の結果、以下のように了承された。

##### ①全体方針

- ・充実の3年間、新たな方針提示の3年間
- ・内部的：研究活動活性化、会員拡大
- ・外部的：広報・交流活動の充実

##### ②組織運営体制の見直し

- ・ 2008 年度までに全体方針を確立する
- ③ 研究プロジェクト
  - ・ 研究プロジェクトの推進  
研究会活動と連携させつつ、成果を 2009 年度までに刊行する
  - 1. 東アジアからの社会構想など
    - ・ 欧米の中国社会研究の総括
    - ・ エスニシティ：民族問題、中国帰国者
    - ・ 東アジア研究からの日本社会の位置づけ
    - ・ 環境、福祉などの領域への拡大
  - 2. 研究成果の刊行
- ④ 研究会活動
  - ・ 研究会活動を活発化する  
2009 年度末までに、地域毎、年 2 回の小研究会を定着させる
  - ・ 秋季研究会の見直し  
2009 年度末までに抜本的見直しを実現
- ⑤ 中国との交流
  - ・ 中日社会学会との相互協定の正式締結  
2008 年度末までに実現する
  - ・ 中国での研究集会の開催  
2009 年度末までに実現する
  - ・ 日本社会学会国際交流部会への協力  
2008 年度末までに ISA 関連の日中協定締結実現に向けて協力する
  - ・ 在外幹事の正式委嘱  
2009 年度までに実現する
- ⑥ 紀要・ワーキングペーパー
  - ・ 紀要の出版社による販売委託  
2008 年度までに試作版を作成する
  - ・ ワーキングペーパーの内容拡充  
2008 年度までに実現する
  - ・ 品切れ分の再版を行う。(第 2 号と第 4 号)  
2007 年度内に実現する。
- ⑦ 広報活動
  - ・ ホームページの本格運用の実現  
2007 年度 9 月末までに実現する
- ⑧ 会員拡大

- ・ 会員数を 300 名に拡大する  
2009 年度末までに実現する

### 3. 幹事の委嘱について

候補者と担当内容について審議され、以下のように決定された。後日、事務局より候補者へ正式に委嘱することが確認された。

- 穂山 新：ニューズレター・ホームページ
- 池本淳一：ニューズレター・ホームページ
- 長田洋司：ニューズレター・ホームページ
- 高 娜：研究プロジェクト
- 陳 鳳：庶務付け
- 永野 武：幹事長
- 野村弘美：ホームページ
- 包 敏：研究プロジェクト
- 松木孝文：ニューズレター・ホームページ
- 南 誠：ニューズレター・ホームページ

(五十音順)

### 4. 冬季研究集会について

期日や開催校について意見交換が行われた。

### 5. 理事会開催の再検討

10 月、11 月には推薦入試などがあって日程調整が困難なこと、日本社会学会大会時に開催の場合、理事の参集が困難なことなどをもって、今年度より理事会は 12 月開催の日中社会学会・冬季研究集会の際に開催することが決定された。

### 6. 中国との交流について

中日社会学会との協定締結を進めることが確認された。また、日本社会学会の中国社会学会との協定締結に向けて協力してゆくことが確認された。

### 7. 次期以降の大会開催校について

開催校について意見交換が行われた。

# 日中社会学会・2007年度冬季研究集会のお知らせ

2007年度・冬季研究集会を開催いたします。2日間にわたって開催します。

**第1日と第2日とで、会場が異なりますのでご注意ください。**

参加費は無料（一般公開）です。多くの方々のご参加をお待ち申し上げております。

最新の情報は学会HP (<http://www.japan-china-sociology.org/>)にてお知らせします。

## ○会場・日時・プログラム

第1日： 12月8日（土）：13:00～17:00

- ・会場 早稲田大学・西早稲田ビル（19号館）3階309教室  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-21-1  
[http://www.waseda.jp/gsaps/top\\_menu/traffic.html](http://www.waseda.jp/gsaps/top_menu/traffic.html)



## ・報告

- ・長田洋司（早稲田大学アジア太平洋研究センター）「研究ノート：中国都市基層構造の変化と近隣関係」
- ・黄斌（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程）「中国における近代ナショナリズムの受容とネーションの想像——梁啓超・孫文及び章太炎のナショナリズム論を中心に」
- ・齋藤あつ子（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程）「都市小説に隠された作家が見る現代中国社会」

司会：首藤明和（兵庫教育大学）

第2日： 12月9日（日）：10:00～17:00

・会 場 筑波大学東京キャンパス（大塚地区）・附属学校教育局・第一会議室

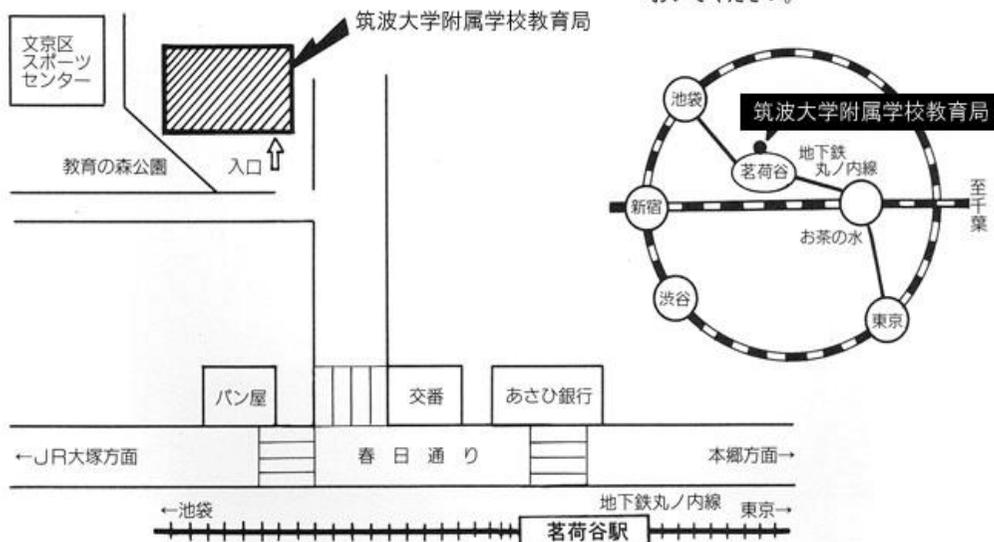
正面の入り口を入ってすぐの部屋(約10メートル)です。

住 所：東京都文京区大塚3丁目29-1

交通手段：丸ノ内線「茗荷谷」駅下車徒歩2分

[http://www.tsukuba.ac.jp/access/otsuka\\_access.html](http://www.tsukuba.ac.jp/access/otsuka_access.html)

- 営団地下鉄丸ノ内線「茗荷谷」駅下車 徒歩3分です。
- 「相談室」は、附属学校教育局の2階にあります。エレベーターを降り、右手の受付・待合室(E218)へおいでください。



・報 告

- ・白鳥蘭（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）

「中国・内モンゴルの面子とプライバシー——データ分析に基づいた意識に関する一考察」

- ・野村弘美（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

「中国における社会階層構造の変容と「技術系知的階層」——都市のライフヒストリー調査データから」

- ・石井健一（筑波大学大学院システム情報工学研究科・社会システムマネジメント専攻）

「日本人の欧米崇拜とアジア志向——内容分析と質問紙調査から」

・意見交換会

- ・中村則弘（愛媛大学）「日中社会学会と中日社会学会の共同プロジェクトについて」

司 会：未 定

お問い合わせ先

ご不明な点などございましたら、事務局までお問い合わせください。

## ■宮城宏先生と日中社会学会

塩原勉（大阪大学名誉教授・甲南女子大学元学長）

創設当初から本学会を支えてこられた宮城宏・第3代会長が、この度、学会活動からリタイアされることになりました。先生はアジア社会に一貫した関心をもたれ、インドのカーストから中国の農村や家族へと射程の広い研究をされてきました。

中国で改革開放が始まり、社会学が復活するや、すかさず山東省の農村調査（1985年）を陸学芸教授と甲南女子大学チームとの共同で実施され、中国社会科学院との連携を強く保ってられました。1991年の「関西社会学者訪中団」の派遣、「中国社会研究会」での若手中国研究者の育成など、関西における中国研究への関心と日中学术交流の機運を一気に高めることに主導的役割を担われました。

この間、いちはやく中国人留学生を受け入れ、社会学研究者として博士号を与えて帰国させるなど、日中教育交流においても先駆的な貢献を果たされました。

日中社会学会は、いまやいっそう緊密にジョイントする新段階に入りつつあります。ここに辿り着くまでの長い道程において、宮城宏先生は日中社会学の真の交流のための基礎固めに尽力してられました。まことに大きい功績であります。

今後も日中社会学会を見守りつづけて下さることと存じます。

## ■宮城宏元会長の退会に寄せて

中村則弘（日中社会学会会長・愛媛大学）

ニューズレター第50号(2007年5月)に、本学会会長として多大な貢献をされてきた宮城宏先生(甲南女子大学元学長)の退会が報じられている。先生の体調などは聞き及んでおり、これまで正面から会の活動に参与して下さったことを、改めて感謝するばかりである。

宮城先生の本学会に対する思いは、「わたしと中国とのかかわり―青井会長を引き継ぐにあたって」(『日中社会学研究』第7号, 1999年6月, 1~4ページ)の巻頭言のなかで触れられている。福武先生、青井先生ともども、社会学における中国との研究交流、中国での調査実施について途を拓いてこられたことが、淡々とした、謙虚な語りの中からは窺える。ここで先生と本学会とのかかわりを饒舌に述べることは、何より先生に失礼と思える。会員各位には、第7号を新たためて紐解いていただきたい。

ところで、日中社会学会はトランスナショナルな方向での取り組みを続けている。中日社会学会との交流協定の基本合意、多くのメンバーが参加した日中研究者の協力のもとでの叢書刊行、共同プロジェクト推進などである。これらは、中国の研究者との、胸襟を開いた、時として本音の激論を交わすなかなかではの取り組みである。初歩的ではあるが、徐々に成果を結実させつつある。いささか手前味噌かも知れないが、これまでの学会にはない道筋を切り拓いているとも思っている

ひるがえって、こうした方向性をいち早く打ち出されていたのは、宮城会長だったのである。それは福武先生の思いを、素直に発展させた内容とも思える。前掲雑誌3ページを確認していただきたい。そこにおいて、21世紀に必要な社会像は、「厳しい現実に立ち向かう知恵を共有し互いに発信し、矛盾の克服を目指す状況」からつくり出されるのであり、「われわれ日中社会学会は、その一翼を担う」のだということが明確に表明されていた。

先生はその人柄を反映してか、理事への要求などはあくまで謙虚で紳士的だった。ただその志は、先生が管掌されていた平等院の、鳳凰堂の天女のように、中国と日本の、そして世界の空を越えて駆け巡っておられたのではないだろうか。

現在事務局の方で名誉会員としての承認手続きがなされていると聞き及んでいる。これから第一線は引かれるが、ぜひとも種々のアドバイスをいただきたいものと思っている。「飲水思源(水を飲むときは源を思う)、(井戸を掘った人を忘れない)」という中国の諺が心をよぎっている。

## ■中日社会学会との協議

中村則弘(日中社会学会会長)

中国社会科学院社会学研究所副所長室において8月31日(金)、中日社会学会会長である陸学芸教授と会談する機会をもった。内容は、1)日中社会学会の研究プロジェクトにかかわる共同推進依頼、2)中国での研究集会開催にかかわる協力依頼であった。

研究プロジェクト「中国・東アジアからみる日本社会」については、「すばらしい企画であり、協力を惜しまない」とのことであり、両学会が共同して取り組むことで合意した。さらに、他研究所との連携を考えてはどうだろうかということにまで話が及んだ。早速、羅紅光教授、王頡教授の方に、ネットワーク・リストの作成を指示するとのことでもあった。なお、「日本と中国の比較研究」は、この企画と合わせて実施して行くこととした。

「西欧の中国研究の系譜的・批判的検討」についても、全面的な賛同を得ることができ、共同して行うとの合意に至った。ただこのテーマについては、長期的かつ腰を据えた取り組みにする必要があるということで意見の一致をみた。

一方、中国での定期研究集会開催については、中日社会学会との共同開催を念頭においた協力体制構築の合意を得ることができた。会場その他についても、中国社会科学院の会議室などの利用に便宜を図っていただけるとのことだった。

会場設定では、国際交流基金(日本)の北京事務所が新築ビルに移転したとの情報に接し、その会議ホールを視察することとした。100人弱収容の、プレゼン設備も整った、使い勝手のよさそうなホールだった。ただし、同基金の方からは、学会使用の場合、一般の方も参加することが貸し出し条件となることとの説明をうけた。

以上のように、研究プロジェクトの共同推進については、中日社会学会からの全面合意を得ることができた。これからは「鼎の軽重を問う」ではないが、われわれの力量こそが問われるであろうと実感した。あわせて、毎年8月下旬を目途とした中国での定期研究集会についても、会場設定などには全く問題が生じないことを確認できた。

最後に、陸会長はアメリカからの帰国直後で、他所での重要会議参加中にもかかわらず、わざわざ時間を空けてこちらとの会談に応じていただいた。このことをあわせて付記しておきたい。

## ■留学雑感——緊急レポート 現代中国結婚事情——

池本淳一(大阪大学・蘭州理工大学)

大家好!池本です。私は今、甘肅省蘭州市にいます。実は今学期から、蘭州理工大学で再び日本語教師をすることになりました。本当は今年の夏に帰国する予定だったのですが、調査と論文執筆の時間捻出のため、あと一年、中国滞在を延長することにしました。というわけで、今後もこの「ニューズレターの四コマ漫画」こと留学雑感を継続させていただくことになりました。今後ともよしなしに。

さて、蘭州レポートは次回にまわすことにして、今回は現代中国の結婚事情について書いてみたいと思います。と言いますのも、わたくし、このたび8月13日に中国人の朱明艶さんと遼寧省撫順市にて挙式いたしましたもので。てへへ。そういうわけで、今回は私たちの結婚を主な事例に、現代中国の結婚事情をレポートしてみたいと思います。

二人で結婚を決めた後、週末を利用して彼女の実家に結婚の承諾を得にいきました。実家にはすでに三回ほど遊びに行っており、向こうのご両親もうすうす結婚の意志を感じとっておられたようで、快く承諾していただきました。そのさい、結納金にあたる「財礼錢」をお渡ししました。

普通、財礼錢の額は農村部ほど高く、都市部ほど安くなる傾向がありますが、一般的には2万円程度、中には5~6万円渡す場合もあります。また中国では「分房」の伝統の名残りか、結婚後は親と同居せず、新婚家庭で「房子」(普通はマンションの一室)を構えます。ちなみに中国の「房子」

はコンクリート打ちっぴなし、洗面台や浴槽も取り付けしていない裸の状態ですべて自分で選択・購入していきま。よくバスに乗っていると、郊外に内装屋が密集した通りや、「家具城」と呼ばれるデパート並みに大きな総合家具売場を良く見かけますが、それらはこのオリジナルチョイスの房子造りのためです。

この新婚の房子は新郎側が全額負担して購入するものであり、さらに上述の財礼金やさらには結婚式代もすべて新郎持ちですから、新郎側の経済的負担は日本よりも大きいと思います（ちなみに新婦側は、受け取った財礼金で、新居の家具や電化製品などを購入します）。しかし大連などの都市部でも、20代男性の年収は2万円前後であり、結婚費用を新郎本人が支払うのは不可能です。それゆえこれらの結婚費用は新郎の親が支払うこととなりますが、それでもその負担は大きく、中には貯金を全て使いさらには親戚中から借金して、ようやく息子の結婚資金をそろえる親も珍しくありません。これは言うなれば、親からの経済的援助無しには、男性は結婚もままならないということでもあり、このように親から独立し家庭を持つさいにこそ、親に最大限に依存せざるをえない構造が、社会階層や孝行心の再生産に一役買っているように思います。

ちなみに私の場合は彼女のご両親が、私がまだ学生であり国際結婚であることも考慮してくれて、サイ礼金も一般的な額より少額、房子購入も当分見合わせ、結婚式は中国と日本で簡単なものを行うのみ、ということでした。

で、ご挨拶を済ませた翌日、そのまま瀋陽にある日本領事館と結婚登記所に行き、結婚手続きをしてきました。昔は国際結婚は健康診断もあり、申請受理までかなり時間もかかりましたが、今は申請から三日で結婚証明書が受理できます。ちなみに結婚証明書を受け取った後、そのまま日付の入った教卓?の前に連れて行かれ、そこで「結婚の誓い」のようなものを読み上げます。苦労しながら中国語を読み上げていると、職員がそのシーンをパシャリ、と写真に撮ってくれました。聞くと、瀋陽市が行っているサービス?で、89~200元前後（枚数とアルバムの種類で異なります）で「結婚記念アルバム」を作ってくれるとのこと。勝手に記念写真を撮られて売りつけられるとは、遊園地のジェットコースターの絶叫写真みたいだな、と思いました。

さて、結婚式の方ですが。中国では神社や教会、また専門の結婚式場での結婚式は少なく、ホテルの会議室やレストランのフロアを借り切って行うのが一般的です。私たちの場合は、撫順にある煤都賓館という、元・大和ホテルを改装した古風なホテルの会議室を借り切って行きました。ふつう、結婚式会場の入り口には、空気で膨らませるビニール製の真っ赤なアーチ状の「鵲花門」を設置します。その天辺には男性を象徴する竜と、女性を象徴する鳳のオブジェというか突起物があります。そして結婚式前夜は新婦は実家に泊まり、新郎と会うことが出来ません。そして式の日の朝、新郎が新婦を飾り立てた車で迎えにいき、会場に向かいます。そして会場に着くと、いっせいに祝砲（鞭砲）が空に向かって打ち鳴らされ、新郎新婦の登場を告げます。そういえば大連留学中、週末になるとパンパンと祝砲が鳴り響いていましたが、中国に来て間もない留学生仲間たちの間では、「あれは旅順の海軍の演習だよ。解放軍はすごいね！」と話していたことを思い出します。また式の開始時間は、8時8分や10時08分など、「8」のつく時間です。私たちの式は9時18分開始予定、実際には遅刻者を待っていたので9時58分に始まり、12時ごろには終了していました。

また一般に、中国の結婚式では純白のウェディング・ドレスが主流ですが、中国らしく真っ赤なドレスも人気があります。私たちの場合は、私は柿色のワイシャツにズボン、妻は式の前半はレンタルした真っ赤なウェディング・ドレスを、後半は予め購入していた白のカクテル・ドレスを着ました。また私たちの結婚パーティでは、三段重ねのケーキのカット、ピラミッド型に重ねた六層のワイングラスへの倒酒、結婚指輪の交換などがあり、ここらへんは日本と変わりませんでした。そして最後に、新郎新婦がお互いの右腕をクロスして、ワインを飲みます。なんか熱血漫画の一シーンみたいで面白かったです。また私たちははしませんでした。最近では、これらの儀式が終わった後、新郎新婦が来賓席に向かって小さなスイグルミ（携帯電話につけるような小さなやつです）を

投げるのがはやりのようです。このスイグルミを掴むと幸運になるとか。ライスシャワーならぬ娃娃

シャワーですね。

これらの儀式が終わると、最後は「<sup>ディンイェン</sup>点煙」です。これは各テーブルを回って、来賓者に煙草をくわえてもらい、そこに新郎がマッチで火を点ける、というものです。このさい、来賓者は赤い小さな封筒にいれた「<sup>ホンバオチェン</sup>紅包錢」を渡します。実質的に、これがご祝儀となります。私たちの場合、新婦の同級生や一般的な親戚は100元か200元、仲の良い友人や親戚からは300元か500元、なかには1000元も包んでくれた方もおられ、合計でパーティ代と同じぐらいとなりました。貧乏夫婦にはありがたいことです。

そして点煙が終わった後は、新郎新婦も席について食事を取ります。式には明確な「閉会」時間はなく、来賓者それぞれが頃合を見て会場を後にします。私たちの場合は、点煙が終わった頃から一人抜け二人抜け、だいたい12時頃にはみんな帰っていきました。

とまあこんな感じでした。未だに結婚した実感が湧きませんが、ここ蘭州で心機一転、研究に励みたいと思います。それでは、今回はこのへんで。

## ■事務局からのお知らせ

### □宮城宏先生へ「名誉会員」の称号をお贈りすることについて

宮城宏元会長が今年5月に本学会を退会されました。長年に渡る日中交流、及び、日中社会学会発展への多大なご尽力に感謝の意を表し、今年度理事会事業として名誉会員の称号をお贈りし、引き続き、機関誌やニュースレターなどを進呈することになりました。

### □新入会員

### □学会ホームページについて

石井健一理事のご協力の下、広報や交流の場として、学会HPの充実に努めています。皆様ご自身でHPをお持ちの場合、日中HPへのリンク設定をご検討くださると幸いです。

---

### 日中社会学会ニュースレター No.51

発行：日中社会学会事務局  
〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1  
兵庫教育大学・首藤明和研究室  
info@japan-china-sociology.org

shuto@hyogo-u.ac.jp

tel・fax: 0795-44-2165 (研究室直通)

(事務局・業務補佐)：吉岡智子

nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp

tel・fax:089-927-9366

日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

日中社会学会・公式HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2007年11月